
異世界・オーリエン

サイキアスカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界・オーリエン

【Zコード】

N4257A

【作者名】

サイキアスカ

【あらすじ】

真紅は、普通の人間みたいだけど、ぜんぜん違う…なんと真紅は・・・。そして真紅は、異世界・オーリエンに来る。そこで出会ったのは、少年 キセ。そして、真紅とキセとその仲間たちが繰り広げる、行く先判らない、なぞの物語が始まる！

第一編 1・1（前書き）

不完全って、悲しいよね。。。

黄金の膝まである長い髪。

それを、鮮やかな赤いリボンで左右後方両サイドで結っている。

背は、とてもといわんばかりにい小さい。

透き通った青い眼に、細い手足。

透明な白い肌。

大人っぽい、白いくしゅっと、しわになつていてる長袖のトップス。
薔薇の刺繡が目立つ。

短いデニムのスカートの中に、短いズボンをはいている。

彼女 東宝真紅は、大きな自分の家の敷地にある、池の前にいた。

東宝家は、山を何個も持つていてるような大きな家柄である。

その中の、令嬢なのだから当然おとなしいイメージを持つ。

いや、それは一時の思い込みなのだ。

全ての令嬢が、おとなしい・物静かだと思つのは間違つていて。

真紅の場合、一度脱走したことがあつた。

そのときは、家の者全員で追いかけたが、とうとう捕まらなかつた。まだある。

真紅はなんと、家の周りに、ありえなく深い（大体7～8m）の落とし穴を10個以上は創つた。しかも一晩で。

そして、まだある。

真紅の場合、料理が下手であつた。

小さい頃から英才教育を受けてきた真紅。

頭は、小六の体で東大の学力はある。

なのに、料理などの家庭科はどうしてもダメであつた。

クッキーでハートを作つても、絶対に岩形になつてしまつ。しかもマズイ。

家のメイドさんが一度食べた。

すると、そのメイドさんは1ヶ月間苦しんだそうだ。

まだあるが、説明していると、時間も生きている時間も消える。

真紅は、池に写っている月を見ていた。

なぜか、ホンモノよりも面白かったからだ。

風が吹くたびに、月が揺れる。

「…………様…………！」

ピクッ、と真紅の体が揺れる。

「お嬢様…………！どこですか…………！？」

ワイワイとざわつきが近づいてくる。

家の者だ……！

真紅はそう思った。

だが、動きはしない。

ここは、絶対に見つからない。

ここは、異世界・オーリエンだからだ。

常人じゃ見つけられない。

真紅がここを見つけたのは「あの日」の直後であった。

「あの日」とは……真紅の両親が死んだ日である。

真紅の両親は、まだ、真紅が幼い頃に死んだ。

謎の炎に焼かれ、死んだ。

真紅が、光を失い、彷徨っていた時である。

突然、魔方陣が現れた。

この魔方陣は普通の魔法陣に、もう一つ、周りが付いていた。

真紅が近づいたと同時に、周りが回った。

その瞬間、謎の扉が現れ、それがここへの入り口というわけであった。

「はあ……」

真紅は見飽きたのか、近くの木に腰掛けた。

ホンモノは完全だ。

ニセモノは不完全だ。

真紅はどうぢらかといふと、不完全のほつが好きである。

実際 真紅は普通の人間とは違ひ

「失照作」である

生まれる前の真紅は、もう自分の父親の手によつて力を埋め込まれていた。

不思議な力・謎の力・可笑しな力

失敗作は使えない。

そう、真紅は聞こえた。

17

どこからか人の気配がした。

二〇〇〇年九月

ガサ・・・ガササツ！

雀か二、人の氣記が

確かに人の気配がしたし音も聞こえた！
真紅は不思議と怖くは無かつた。

むしろ、殺人鬼ならば、殺してほしいと思っている。

ノミの少主がわざわざ

真紅より、1歳ほど大きいらし！

少年は、オレンジ色の頭をしていて、少し長い髪だ。

眼は髪の色よ! も少し濃い
ノレンシ

を深くかぶつた。

「 · · · 誰？」

真紅が聞く。

少年は顔が見えなくても、驚いているようであつた。

「オマエ……ここのはじやねーだろ……むしろ……オマエ……男……？」

1

- 3 -

真紅は、眉をしかめた。

一何言ってんの？大丈吉

女 · · · · · · · · ?

— そう、女

しばらく一人の間に沈黙が流れた。

真紅は、首をかしげる。

何？この人・・可笑しい。
女も知らないなんて・・。大丈夫かな？

真紅はそう思つたが、口には出さなかつた。

その時、ガサ、ガササツ、と茂みが揺れた。

1

少年が、
揺れたほうを見る。

灯りがちらほらと見える。

「…ひばり」

少年は、素早く

真紅の口を塞ぎながら。

「アーヴィング！？」

真紅はわけの分からないまま、叫ぶ。

「黙れ。
殺されるぞ」

少年が声を押し殺して言う。

1

真紅の体がその言葉を聞いて、止まつた。

か
すくに後悔の念に襲われた

なんて？あたし死にたしのに

何で止まってるの?

可笑ししよ・・もしかして・・またあたし・・

—
•
•
•
嘘

真紅は、すぐ傍にいる少年にも聞こえないようなども小さな声で

言つ。

「何か言つた？」

真紅は首を左右に振る。

少年はそれを見て、「さうか」といってすぐに、灯りの方を見る。

ナンデ？

真紅は、硬直した。

今のは、真紅の声では無い。

似てゐるけど違う。

もっと、冷たい、押し殺したような声。

真紅は、上を見る。

ゾクツ！と、背筋に冷たいものが走る。

真紅が見たのは、とても冷たい、怖い顔であった。

眼には光は無く、ただ、赤く・つまらないものを見るような眼であり、一つ一つの動きは、まるで何かを切つていてるかのよひ、動いている。

大きなフード付きの、黒いマントの下に、赤いタンクトップと、赤くベルトが付いた、かなり、だぶだぶな長ズボン。

真つ赤なほど赤く、長い髪。

髪についている、小さな鈴が、風に揺られ、リンッヒと、鳴る。

危ない。

真紅は、一瞬でそう感じ取つた。

しかし、今は逃げられない。

「ダイジョウブ・・・イマハオソワナイトラ」

少女が冷たい声で言つ。

「えつ・・？」

「イマハオソワナイトラ・でも、次は・・・覚悟しておくんだね」

少女・・・いや、よく見れば少年が真紅の前に一瞬で現れそう言つた。

「 誰？」

真紅はこの状況の中でも、名を聞いた。

「 ・・・ボクは、グレン。この世界をいづれ支配するものだ」

少年 グレンは、薄く笑うと、消えた。

「 ・・・」

真紅は一気に体の力が抜けたのが分かつた。

「 どうした？」

「 ・・・」

「 ・・・なんで・・・も・・・無い」

真紅はそういうもの、ひどく動搖していた。

少年は、心配そうな顔をした。

それに気づいた、真紅は「大丈夫だよ」と小さく言つた。

灯りもよつやく言つた頃、少年は言つた。

「 今日は、家に来い。オマエ・・・精神的に危険だから」

精神的といつのは、今の真紅にピッタシの言葉であった。
真紅は、ひどく動搖していて、動けはしない。

というより、氣を失いかけていた。

「 はあ」

少年は、大きなため息をつくと、真紅のほうへ向いた。

今の真紅は、まさに「壊れた人形」であった。

少年は、真紅を抱きかかえると、またフードを深くかぶり、木をわたり、家に向かつた。

ガチャ、と街角の少し古びた家のドアが開かれる。

「 ただいま・」

少年はぶつきらぼりに言つ。

「 おっ、おかえり〜！キセ！」

「 ・・・やつと帰つたか・・・遅かつたな」

「ホントだよ～！捕まつたかと思つたじやん！・・・ありい？」

家の中に居た4人の少年は、少年 キセのドアを開けた音により、いつせいにドアの方を見た。

た。そしてその中の一人、がキセが抱いている、少女 真紅に気づい

「……およよ？誰？コイツ……まさか、浮氣！？オレという存
在がありながら～！～」

「なんでだよ」

キセは、飛び掛ってきた少年 ミゼルを、パンチヒ、ドーンで弾き飛ばす。

「モード」の逆訛モノ

「…………野じやない？ どーこー？ うー？」

中に居た少年4人は、顔をしかめる。

キセは、相変わらず、ぶつきりぽつて言つ。

その時、なぜか、ソファーから飛び出していた、針金に真紅の胸元の服が引っかかつた。

• • • • ?

キセはそれに気づいていなく。

横に寝かせようとする。

「あつ」
ない音が部屋に響いた。

少年 レージが、「ちいさな」ことの顔である。

1

キセは、思わず眼を大きく開けた。

どうした？

少年 ナキアが聞く。

「いや・・・これ・・・薔薇の・・・あざ・・・?」

「薔薇のあざ?」

その瞬間。

ブワアツ!

と、辺りを輝く赤いものが覆つた。

「・・・薔薇の花びら・・・!?」

その瞬間、薔薇の花びらが一斉に消え、中から赤く光る、神秘的な小さな少女が現れた。

『こんばんは・・・我が主人の秘密を知つた者』

少女は、にっこりと笑つて言つた。

「我が主人の秘密!?」

『そうです。私の主人・・・真紅様は、人間ですが、人間ではありません。そう、例えて言うならば・・・「ドール」・・・「生きた人形」です』

「生きた・・・人形?」

『そうです。この力は、真紅様のお父様・ミゼラール様が埋め込まれたものです』

「父親に・・・・・・」

『このあざは、その証拠』

少女はそう言つと、すうつ、と消えていった。

その刹那、真紅は目を覚ました。

そして・・・。

「!・・・・・み・・・見た?・・・スイラーム・・・を・?」

キセはコクリと頷く。

「 つ つ ・・・」

真紅は言葉を一瞬失つた。

悲しみに満ちた顔であった。

「スイマー・・・・・・」

真紅は眼をギュッと、瞑つた。

そして、

「お願い・・・忘れて・・・」

真紅の眼からは、透明な霧が落ちた。

「お父様・・・なんで、あたしだけ・・・こんな「不完全」なの・・・？」

真紅はポツリと呟つた。

そして、真紅はとうとう泣き出した。

「お父様・・・なんで？お父様・・・」

そう小さく何度も呟きながら。

そのとき、真紅の前に手が差し伸べられた。

「泣くなよ」

キセであった。

「そうそう！人生明るく！」

異常に明るい少年 ミゼル。

「そーだよ。ほら、食べる？」

お皿を持った、

レージがスープを差し出す。

「これうまいよ、絶対元氣出るって！」

ミゼルまでとはいかないが、明るい少年 ナキア。

「泣いてちゃ、ダメ。明るくいかなきや」

この中で、キセの次にしつかりしている少年 ルイーゼ。

「あつ・・・・・・」

真紅はいつのまにか、涙が止まっている」とこぼづいた。真紅は服で涙を拭い、5人のほうを見る。

「・・・・・ありがと・・・・」

「どういたしまして」

ルイーゼが軽く、挨拶をする。

「でもさ、お礼に・・いいよね？」

ミゼルが、おいしそうな物を見るよつた目で真紅を見た。

「？」

「別にいいんじゃない？」

「そう?じゃあ・・」

ミゼル達が、真紅の周りに寄ってきた。

「いつただきま～す」

5人は、真紅の頬にキスをした。

「うわっ! おいし～い!」

「うん・・すごいじやん」

「え?え?ええ! ?」

真紅は何がなんだかわからなかつたが、キスされたことはしつかり覚えていた。

「一体何なの! ?」の人たちい～～～! ! !

第一編 1・1（後書き）

ちなみに、「グレン」は、「グ」にアクセントをつけて

・

「グレン」と呼んでください！

う～～～～・・書くの遅すぎて、眠い・・

何なの！？」の人たちはあ――――

「んつーつまかつた」

とミゼル。

「うん。今までの中で一番だね～」

レージ。

「そだな」

とキセ。

「おいし～！～！」

とナキア。

「すごい・・「黄金果実」の中でも、レベル高いほうじゃん？」

ルイーゼ。

「・・・お・・黄金果実？」

真紅は顔を真っ赤にしながらも、聞く。

「うん。この世界、「オーリエン」には、黄金果実と書いて、とても甘くておいしい、生氣があるんだ。それを黄金果実っていうんだ！」この黄金果実の上位ランクには、貴族とかのお偉い人方しかいないんだけど・・人間界つて、凄いんだね！というわけでもつと食べさせて！」

「え？」

真紅は飛び掛つてくる、ミゼルに驚いた。が、

「やめろ。大体コレはオレが見つけたんだ」

キセがミゼルの首を掴んで言つ。

「え～～～～～！？ 独り占めはダメなんだよ～～～～～！」

「オマエにだけは言われたくない」

「そうだよ、ミゼル。人疑義が悪いよ

「ちい～～～～～・・じゃあ、今度貸して！」

「さあね」

キセが、薄く笑いながら言つ。

「…………で、お取り込み中悪いんだけど……」

真紅が、話を遮つた。

「あたし、元の世界に帰りたいんだけど……」「なんで?」

キセが聞く。

「えつ……だつて、」リリじゅあ……」

「無理」

と無表情で、キセ。

「うんうん」

腕を組んで、ミゼル。

「そうだよ」

「こやかに笑いながら、ルイーゼ。

「嫌だよ」

口を尖らせながらナキア。

「僕らを置いてく氣?」

涙目で、レージ。

「えつ?と……言われましても……」

真紅は戸惑う。

ていうか……そう言われましても……。

「つーか、あの世界のどこが良いんだ?」

唐突にキセが言った。

「えつ……?」

真紅は、少し困った。

「別に……でも、あたしが本来居る場所だったから……」

お父様の行方も搜してゐる……

「で?それで?もしかして、んだけ?」

キセがつまらなそうに言つ。

・・・お父様を探してゐる

「お父様を探してるのは、あたしだけじゃないんだから。雛桜だつて、青月菜も赤月菜も・・それに・・・幻影草も・・みんなを侮辱しているようなものよ」

「真緒は、おまかせを假る

「キセ・・・・オマエいつも納得行くまで、聞き返す・・悪い癖だよ」

キセはルイーゼの方を少し向いた。

「たまではよ。『まんないしやね』か。たまたま探しのためには人生費やすのって。なんだか、しんねーけど、オレだつたら探さないで、今を生きるぜ？」

キセはルイーゼに、言い返す。

まあ、確かに人探しのために人生費やす人は珍しいだ

諦めない人は別だが。

「でも、あたしたちには、お父様の記憶は無い。有るとしたら……」

「優しくて暖かい人」ってことぐらいなの。それに見つけたら言い

「なんて？」

ミゼルが珍しく真剣に聞き返す。

なんで、こんな「不完全」なの?って。。。

ルイーゼが、本を持ちながら言った。

真紅は、ぐつ、と言葉に詰まる。

「……………それは……………」

良いし、ん別に答へかくなにれは」
キセが、無愛想に言つ。

キセが、無愛想に言う。

「どうせ、つまんねーことなんだし」

今まで我慢していた、真紅がキレた。

「……………何？」

「何じゃない、アナタ…………残酷」

「残酷？ そうだな、その通りだよ。で？ これはなに？」

キセが、壁に突き刺さった薔薇の花びらを指差す。

真紅は、肩にかかった髪を払うと、言つた。

「あたしの…………術。まあ…………気にしないで。すぐ見れなくなるから」

真紅は、右手を仰向けにし、胸の前に持つてきた。

すると、ブワアツツ、と一斉に薔薇の花びらが飛んできた。

「うわっ！」

キセ以外の4人は、目を覆い隠した。
そして、しなやかな薔薇の花びらは、一気に凶器となり、キセに向かつて飛んできた。

が、バシコツ、と全ての薔薇の花びらは粉々になつた。

「剣……………？」

「そう、コイツは雷龍だ」

キセはそう言つた。

雷龍とは、取っ手に大きな黄色い宝石が埋め込まれた、キセの腰ぐらの高さの剣である。

「へ～…………スライラーム！」

真紅は叫んだ。

すると、神秘的な小さい少女が出てきた。

『何でしょう、ご主人』

「スライラーム、チエンジ…………出来る？』

真紅は、薄く笑いながら言つた。

『おまかせれ、では何にでしょ』

スイラームは、敬礼みたいのをする。

「じゃあ・・・アレ」

真紅が指差したのは、キセがもつてている剣であった。

『アレですか？お任せください』

スイラームはそう言うと、赤く光り始め、気づいたときにはもうキセの持つている剣に変わっていた。

「なつ？」

「どつ？スイラームのチョンジはあ？」

キセは、呆気に取られた。

と、真紅は可愛らしい声で笑い始めた。

「あはははつ！やつぱ、この瞬間大好き！だつて、皆かなり驚くんだもん！」

真紅はしばらく笑っていたが、とうとう、先行で飛び出していた。驚いていて、動けなかつたキセだが、間一髪で避けた。

だが、真紅は近くにあつた木を使って、キセのいる方向へ飛んで來た。

「くつ・・・・・・」

キセは、空中で真紅の剣を抑える。

キイイイイインッ、と高い音がする。

二人は同時に、地面に着いた。

その刹那の時間に、真紅は叫んでいた。

「薔薇の刃よ、相手を切り刻め！」

その瞬間、扉が現れたときのように、魔法陣が現れた。それも今までの中で一番大きいというほど大きい、魔法陣。

そして、ゆっくりゆっくり・・・しだいに速く、魔法陣の外側が回る。

その時、ものすごい量の赤い刃がキセに向かつて、飛んできた。

「キセ！」

4人は叫んだ。

だが、ルイーゼは見つけた。

真紅が小さく呟いているのを。

3人には聞こえなかつたが、ルイーゼに聞こえた。

「そして、その直前で消え去れ」と。

真紅はもともと、相手を傷つける気など無かつた。

ただ、あいてと遊びたかつただけであつた。

薔薇の刃が直前まで来たとき、キセは1歩引いた。

それは、この世界に来て、初めてだつたといえよう。

その瞬間。

さああああああああああああああああああああつ

見事に、薔薇の刃は碎け散つた。

そして、しなやかに散つていつた。

「・・・・・・・・・・・・」

キセは状況が分からなかつたが、ようやく分かつた。

自分が助けられたと。

「はああ～～～・・・」

キセは大きくため息をする。

そして、キセは雷龍を消す。

「負け。オレの負け」

真紅は、スイラームを自分の体に戻す。

そして言った。

「つまらない」

いや、言おうとした。

「楽しかったよ」と。

しかし、今。真紅の声では無い、冷たい声が聞こえた。

バツ、
と真紅が振り返る。その刹那の時間。

グレンは、真紅の首を掴んで、持ち上げた。

グレンの方が少し背は大きい。

なので、ほんの少しだが、真紅は宙に浮かんだ。

「ケホツ！く・・・くるしイ・・・」

真紅は、苦しみついでいる。

「キリッて、本当に馬鹿だね。殺しちゃえれば良いんだ。こんなクズ」

「ウウ・・・い・・いやあ・・・」

真紅は、苦しそうに顔をしかめながら囁く。

「あつそ。まあいいや、ボクは食事が出来るだけでも」

グレンはそう言って、真紅の唇に自分の唇を押し当たった。

「ウニイハニ？」

！」

う。 キセ・その他仲間は驚いた。 か。 一番驚いたのは真紅本人である。

グレンは「食事」と書いていた。

ケレンの食事は、生餃子吸いなどであつた
レバ、煮豆、味噌汁など、何でもおなかへ入る

グレンは、しばらくしてから、真紅から離れた。

「ジ」馳走様。
おーしかつたよ、とても。それじゃ、また。・・・そう

የኢትዮጵያ • ልማት ማረጋገጫ

グレンは紅蓮の炎に半分体を入れながら言った

ヨミの父親は、偶然ヨミを「不完全」にしたんじやなくて、最初から「不完全」にするつもりだつたんだよ。計画に書いてあつた

ズキンッ

心が痛んだ。

「え・・・? 嘘・・・・・・お父様が・・・・?」

「嘘だと思つなら聞いてみるといい。どうしてこのかは教えられないけどね、じゃつ」
グレンは、炎の中に消えていった。

夜、真紅は一人、池の場所に居た。
ここは、最初にずっといた場所。
真紅は池に移つて、三日月を見ていた。
これは、完全なもの。
だけど、欠けている。

満月には届かない、三日月。

ほろり、と雲が落ちた。

透明な、雲である。

その雲は後から後から溢れ出していく。

「う・・・う・・・お父様・・・・・・酷い・・なんで・・なんでえ

！…」

真紅は、地面にへたり込んだ。

もう、泣いている意味さえも判らない。

「真紅」

突然、後ろから声がかかつた。
キセであった。

真紅は、少し後ろを向いた。

キセは眼を赤くしている、真紅に驚いた。

「大丈夫か？」

キセは心配そうに、手を差し出す。

しかし、真紅はその手を無視して、キセに抱きつく。

「キセ……なんで……？お父様はなんであたしを……？」

真紅は決壊したダムのように涙があふれ、もつじうてもすることが出来ないで居た。

「…………判らない」

キセは、真紅をなだめてあげる事しか出来ない。

その間にも、真紅は泣き続ける。

しばらく、この状態が続いた。

キセはようやく落ち着いた、真紅を強く抱きしめる。

「大丈夫。皆ついている」

キセは呪文のように繰り返す。
真紅は、うん、と肯いている。
しばらく、真紅は黙つていた。
そして、唐突に言つた。

「キス、していい？」

「はあ？」

キセは呆気に取られたが、「しょうがないなあ」という顔をした。

不完全な三日月の夜。

二つの影が、一つに重なつた。

しかし一人は知らない。

その裏では、今、大変なことが起つとしている。

1 - 2 (後書き)

なんか、グレンと紅蓮が続けて出たよね？ ダジャレじゃないからね！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4257a/>

異世界・オーリエン

2010年11月16日08時26分発行